

## 彦根市のマラリア対策

—小林郁と小林弘の役割—

田中 誠二<sup>1)</sup>, 杉田 聡<sup>2)</sup>, 森山 敬子<sup>3)</sup>, 丸井 英二<sup>1)</sup><sup>1)</sup>順天堂大学医学部公衆衛生学教室, <sup>2)</sup>大分大学医学部看護学科, <sup>3)</sup>西南女学院大学保健福祉学部看護学科)

演者らは、これまでに国立国会図書館憲政資料室に所蔵されているGHQ/SCAP文書のうち、Weekly Bulletinに付録として記載された感染症統計を復刻（電子ファイル化）することによって、占領期における各種急性感染症の発生推移を解明してきた。そのなかで、マラリアの発生推移に非常に特徴的な結果を得た。すなわち、1946（昭21）年の夏には全国的に流行したが、1947（昭22）年以降は唯一「滋賀県」のみで大きな流行を繰り返し、1950（昭25）年になって急激に減少したのである。

“戦後マラリア”に関する研究を行った澤田、大鶴の報告によると、1946（昭21）年の全国的流行が、いわゆる復員マラリアによるものであったのに対し、滋賀県における流行の繰り返しは古くから存在した「土着性の」マラリアであったことがわかる。そこで、われわれは、滋賀県のなかでも最もマラリア患者数の多かった彦根市で展開された「マラリア撲滅運動」について調査を進め、これまでに本対策の輪郭を明らかにしてきた。

彦根市のマラリア対策は、1949（昭24）年1月、近畿地方軍政本部の勧告を受けたことにより始まった。マラリア患者の発見・治療（对人的対策）から、マラリア媒介蚊の発生をなくすための環境整備（対蚊対策）まで包括的に推進し、わずか5年で風土病マラリアの撲滅に成功した。

本報告では、この彦根のマラリア対策を立案し、実施した小林郁と小林弘の人物像を考察する。

小林郁（1887-1974）は、京都第三高等学校を卒業後、京都帝国大学医学部に入学した。卒業後、彦根町（当時）で開業医となる。若年より政治に関心を持っており、彦根町会議員、滋賀県会議員を歴任し、1947（昭22）年に彦根市長に就任した。その在任期間に、近畿地方軍政本部よりマラリア対策の勧告を受ける。そこで、自身の息子であり、軍医であった小林弘を市の衛生課長に就かせ、対策を推進したのである。

小林弘（1916-1991）は、小林郁の長男として生まれた。金沢第四高等学校を卒業後、長崎医科大学に入学、1941（昭16）12月に卒業（太平洋戦争勃発のため3ヶ月繰り上げ卒業）し、海軍軍医として霞ヶ浦海軍病院内科に勤務した。復員後は、彦根市にて郁の開業を手助けし、1947（昭22）年4月に彦根市医師会副会長に就任した。そして、1949（昭24）年4月、彦根市衛生課長に任命され、マラリア対策に着手することとなった。また、マラリア撲滅のための調査・研究機関として彦根市が自前で設立した「彦根マラリア研究所」の所長を兼務した。

小林郁と小林弘がリーダーシップをとった彦根のマラリア対策は、住民と行政、専門家（彦根マラリア研究所では、多くの大学から専門研究者を招聘し調査研究を進めた）が三位一体となって地域の健康問題を解決した、戦後の地域保健活動における1つの成功例である。こうした彦根市の経験を検証し、今日の公衆衛生活動に応用可能な事柄を整理することが本研究の長期的な課題である。また、本対策を経験した彦根市民が現在も多数ご存命であることから、彼らの「記憶」を「記録」として蓄積する努力を継続していきたい。

当日の報告では、これまでに得た経験者のオーラル・ヒストリー（口述記録）も1つの重要な史料として考察を加えたい。

本研究は、日本学術振興会科学研究費萌芽研究「GHQ文書を用いて戦後5年間の感染症流行を解明する研究」（研究代表者：丸井英二）および財団法人トヨタ財団研究助成「いかにして医師親子は風土病マラリアを撲滅したか——第二次大戦後の滋賀県彦根市における地域活動」（研究代表者：田中誠二）の成果の一部である。